〔論　文〕

ジェーン・オースティン『説得』研究

A study on Jane Austen's *PERSUASION*

上　野　正　二
Ueno Shoji

（Ⅰ）はじめに――『説得』の主題について

オースティンの最後の本格的作品である『説得 *PERSUASION*』の主題について考える。これまでに『プライドと偏見』、『知性と感性』、『マンスフィールド・パーク』、『エマ』の四作を読んできて、いずれに関しても筆者の読み方はオースティン解釈の歴史においてはほとんど例外的であることが明らかとなった。したがって、この最後の傑作に関しても、先人の業績に援けを仰ぐことは期待出来ないであろう。

そこで本稿においては、初めに先行作品の概要について触れて、そこからほぼ必然的に予測される『説得』の大まかな構造を素描した上で、このような読み取りの可能性を拓く重要な箇所を可能な限り詳細に読解するように試みたい。

（Ⅰ－１）先行作品との関連

我々が『説得』の主題の何であるかを考える際に不可欠であるのは、先行作品との関連である。どういう場合でもそう言わねばならぬという訳には行かないが、少なくともオースティン作品においては、こういうことが意味を持つ。その点は、昨年の筆者の仕事において、『マンスフィールド・パーク』は次に書かれた『エマ』との関連を無視しては読めないことを明らかにしたことから、理解してもらうことができるであろう。

『マンスフィールド・パーク』は、大方の読者には、トーマス・バートラムの古い地主階級の道徳とクロフォード兄妹が持ち込むロンドンの自由思想とを対比的に描いて、ついにはバートラム的、倫理道徳的なものの重要性を訴えかけられるのだとされている。倫理性が強調されるという点ではその通りだと言える。しかし、思想の対比という点ではそれだけでは片づけることが出来ない。重要な箇所において、作家の人生観の根柢にある宗教性が明確に示されながら、それを押し隠してまで倫理道徳性という〈宗教性を忘失すればそれ自体が怪しくなる〉はずの世俗性の強い一側面が強調されているのである。

その理由は、次作として作家の内で既に構想されていた『エマ』において、倫理道徳性が主人公エマの発達段階の一つとして設定されねばならなかったからである。つまり、『エマ』の主題は、一般に読まれているのとは異なり、主人公に倫理的に生きることが人間の成長であることを受け容れさせた上で、自ら誘って作り上げられた友情を裏切るという没義道な状況に直面させる。エマは、友人が自分の兄のような男ナイトリーに恋をして

いるのを知って初めて、彼は自分だけのものでなければならないという強い要求（つまり恋）を自覚し、「自分の存在根拠に開眼することにより、神の定めた自然本性への背反から自然本性へと立ち返る」[1]ことを敢えて選び取るのである。『エマ』はこうして、そこにおいて全開にする一つの主張、立場を浮きだたせるために、前作において、その立場を匂わせながらも押し隠して、倫理道徳的な生き方を説教的に展開することによって、極めてドラマティックな作品となっているのである。

してみると、『説得』がこれらの先行作品で取り扱った「思想」を踏まえた作品であると推測することは、当然と言うことが出来る。そして、そのように読むと極めて具合がよい。筆者は、さらに今ここで、この作品は『プライドと偏見』から『エマ』まで既に書き上げられている主要な四作品に盛られた思想の総露出であると、断言することができるのである。

（Ⅰ－2）『説得』の立体構造

象徴的な文章を一つだけ取りあげてみよう。この作品の最後の文章は、

「アンは、全身優しさそのものだった。そしてそれはウェントワース大佐の愛情に全く値するものであった。彼女の友人達に、彼女がもう少し優しくない方がいいのにと思わせることが出来たのは、ただ大佐の軍人という職業だけだった。そして温かい彼女の心の日差しを翳らせるものは、ただ将来の戦争の危惧だけだった。彼女は海軍軍人の妻であることを誇りにしたが、戦争の情報が伝わったときに不安にならねばならないのは、（夫と違って）この国家的な重大事よりも出来れば家庭での徳を愛することで本領を発揮する彼女の職業に課せられた一種の税であった」(236,396-7[2])。

と記されている。この作品の初めから、アンを孤独な不安な存在として読み解いてきた読者は、ここでまた不安を彼女の遁れることのできない宿命と解し、この作品の根本気分とする。船乗りの妻というだけで既にそう言いたがるあわてん坊の読者、自己を顧みず、自己の根源を知らぬ読者には、不安定感が伝わってくるのかもしれない。しかし、この場合でもアンはウェントワースへの変わることのない愛情の上に安住して、心配したり安心したり怒ったりしていることを読み損なってはならないだろう。この箇所も、ベースとその上に繰り広げられる事柄との関係性を示しているのである。このようにして、『説得』は全編に亘って何重かの立体構造によって構成されているということが、予想されるのである（本稿では、さし当たり、①アンにおける宗教性と日常生活の喜怒哀楽の問題、②アンにおける宗教性と倫理道徳性との関係、という二つの面のみを論じることになろう）。

先ず以て問題となるのは、アンの思想的基盤に関する読み取りである。

註

1．拙稿「究極の『エマ』解釈？――漱石『それから』」（本学紀要第47巻所収）p.79参照。

2．以下、前の数字は、Penguin classics 版の頁数、後者は岩波文庫版の頁を参考のために挙げている。

（Ⅱ）重要場面の構造解析の試み

主人公であるアン・エリオットがどの時点でいわゆる「人生の根源的意味」を理解して確固たる人生観を手に入れたのかは、記されていない。しかし、「回想」されるウェントワース大佐との婚約解消を論じている記事には、すでにアンにそのような人生理解があったことを思わせる文章がある。またチャールズ・マズグローブの求婚を断ったことを記す箇所にも、それと思われる文章がある。それから時間を物語の〈今〉に戻して、エリオット卿の馬鹿さ加減を紹介し、彼が破産に瀕しその対応手段としてバースに逃げ出し、ケリンチホールをクロフト提督が占領することによって、この作品が動き出す所からは、もう主人公には、迂闊な研究者、解釈者の手には届かないような仕方で、立派な「人生理解」が備わっているのである。以下に、その該当する箇所を逐次検討し、彼女の洞察した「安心の極意」（その上に〈幸福の極意〉というべきものもある）とも言える「人生理解」を明らかにして行こう。

このような論点に関しては、賢明な研究家たちは残念ながら、ヴァージニア・ウルフの言説[(1)]に惑わされて、完全な錯誤を繰り返している[(2)]のである。

（Ⅱ－１）嗤われるべき人々と卓越した人

例によって、嗤われるべき人々から始めよう。

主人公アンの父親、エリオット卿が愚かで財政観念を欠きケリンチ邸を出るところからこの作品は始まるのだが、同じ村に住み亡き母親が娘たちを託したラッセル夫人も相談に乗っている。「彼女は情け深く寛大で善良な夫人であり、深く人を愛することができ、行いがきわめて正しく、礼儀の観念に厳しく、育ちのよさの見本と見なされる物腰をしていた。彼女は教養ある知性を持ち一般的にいって理性的で言行一致していた――」(12,18) とされている彼女の八年前の「説得」がこの作品のモーティブをなしているので、彼女が真に知的で道徳的な人柄であったかどうかというのは、大事な着眼点である。しかるに彼女は、たとえば自分に託されたケリンチ邸経済再建策の作成は、劣悪者の友情を絵に描いたような仕方で、経済破綻の張本人であるエリオット卿への同情が先立ち、結局はほぼ丸投げでアンに押しつけるのだった (13,18-9)。

エリオット卿は、「従男爵名鑑」を愛読書としている人物である。1760年生まれの従男爵という身分にありながら、このような「名鑑」に時間潰しをし、これをこころの慰みにしているというのは、無教養のバカ殿以外の何者でもない。「虚栄がウオルター・エリオット卿の性格の全部であった。身体に関する虚栄と家柄に関する虚栄である」(6,7)。この二つの虚栄に生きる卿は、結局ナルシストという（同）嗤われるべき存在である。そしてこのナルシストであるということは、ほとんどそのまま「自己中心主義者」を意味している。「自己中心」といっても自己を大事にするが故に自己を越え出るそれもあるが、神的なものには言うまでもなく、他人にも心を開かず自己に閉じ籠もってしまう者もある。エリオット卿はまさにそのような人物で、後にクロフト提督に「やれやれ、あれじゃ自分から逃れる訳には行きませんワイ」(194) と批判されるが、彼は「自己愛の牢獄」に囚われの身心なのである。

このバカ親の娘が三人いるのだが、長女エリザベスは、容姿の端麗さだけでなく性格も

父親似である（7,9）から、バカであると決まっている。この作品ではさすがのオースティンも無闇にひとを笑いものにするのに草臥れたか、物語をコンパクトに纏める方に専念したのか、彼女のような性格をからかうのは適当に切り上げている。その分、初めて描かれるタイプとして三女メアリーが存分にコッケイに描かれていると言うことが出来る[(3)]。

ジェイン・オースティンが希代の悲喜劇の名手であることは、既に論じた。一つの作品において悲劇と喜劇を同居させるという恐らく文学の歴史上これまで例を見ない点が、さらに注目されねばならない特徴なのである。その喜劇は劣悪な人物ないしその人物の行為を描写するのであり、悲劇は、寧ろ英雄譚と呼ぶべきであり、卓れた人間およびその行為を描くのである。そういうことが、オースティンにおいては普遍的な特質であるとすると、以上に挙げたような嗤いの対象となる人物とは別に、主人公として描かれる人物は、卓越した人物であるほかない。主人公である次女のアンは、作品の初めには、「知性の優雅さ elegance of mind と気質のやさしさ sweetness of character」（7,9）を備えており、決断においては「正義と公正 justice and equity 以外には無関心なはるかに高潔な思想傾向を欲する」（13,19）人物として描かれているが、とてもそんな表現では納まらないことが、これから追々明らかにされねばならない。

（Ⅱ－２）アンの婚約破棄について

さて、ケリンチ邸の新しい住人が決まる。海軍提督クロフト氏とその妻だが、彼女の弟、海軍大佐のウェントワース氏がアンと深い因縁のある人物であり、八年前に熱烈な恋愛をしながら、わずか三ヶ月の付き合いに終わっている。ラッセル夫人の執拗な説得によって婚約は破棄されてしまったのであった。そこで今、

「二七歳になったアンは、一九歳のときに（R夫人に）考えさせられた考え方とはだいぶ違う仕方で考えた。彼女はラッセル夫人を責めることもしなかったし、彼女の言葉に従ったことで自分自身を責めることもしなかった。しかし彼女は、もし誰か当時の自分と同じ境遇の若い人が助言を求めて来るならば、彼らはあれほど確かな直ぐにやってくる悲惨さ such certain immediate wretchedness と、あれほど不確かな未来の善 such uncertain future good を受け取ることは決してないであろうに、と思った」（29,45）。この文章の面白さは、まず「あれほど確かな不幸」と「あれほど不確かな幸福」の対照である。では前者は何を指すかと言えば、「破談によって生じた惨めな失恋状態」である。これに関しては誰も異論を挟まないだろう。それでは後者は何だろう？アンの場合には、あの『プライドと偏見』の女達が一般に考えていたと言える、結婚できないことに依る「経済的豊かさが得られないこと」（Ch.22）を指すのではなかった。彼女は、エリオット家の経済は破綻に瀕していたとはいいながら、姉ほどではないにしてもそれなりの豊かな生活を送ってきたのだからだ。ではアンが期待はしているが未だに実現できないと言う意味で「不確かな」「次の結婚相手の現れること」をそう呼んでいるのであろうか？しかしながら、残念ながらというか、アンはウェントワース以外の相手を「期待している」などということはなかったのであるから、これも当てはまらないであろう。

少し邦訳を参照させて貰うと、富田彬氏は、岩波文庫版『説得されて』で、「自分のよ

うに当てにならない将来を当てにして、決まりきった目の当たりの憂き目を忍ぶようなことはさせないであろう」(45頁) と、また、大島一彦氏は『説得』で、「あのような不確かな将来の利益のために、あれほど確実な目前の不幸を甘受するようなことは決して勧めないだろうという気持ちであった」(キネマ旬報版38頁) と訳しておられる。これらは近藤いね子氏の「不たしかな将来の利益をめざして、あのような目前の不幸をもたらす助言はしないであろうと考えた」(講談社「世界文学全集11」『オースティン』1969) を元にしているのであろう (これらに似せて「勧める」という語を用いて元の文章を訳せば、「アンは、あれほど確実な直ぐに実現する悲惨さとあれほど不確実な未来の善とを手に入れるように勧めることは決してないであろう――」となろう)。

これらの読み方は、ラッセル夫人の説得にしたがった場合の選択のありようを示しているのは間違いないであろう。すると、前後に記されているラッセル夫人の選択様式とこういう考えが合致するかどうかを検討してみればよいことになる。すると、前には、「生まれと美貌と知性というあらゆる資格を備えたアン・エリオットが十九歳で身を投げ棄てることは、――彼女が十九歳にして、頼るに自分以外にはなく、富を手に入れる望みは極めて当てにならない職業での偶然にしかなく、その職業においてこれから先出世するためにすら何の縁故もない、そんな若者との結婚に巻き込まれることは、じっさい、身を滅ぼすことになるだろう。夫人にはそんなことは考えるも悲しいことであった」(26,41) という文章があり、これに反対した夫人は下線部分を裏返した見解、つまり「富を手に入れる当てがはっきりした」結婚を望んでいたことになる。

アンの場合も、この夫人の説得によって、「彼女はこの婚約は間違いだと、無分別、不適切でほとんど成功は覚束ない、そして成功に値しない間違った婚約だと信じるように説得された」のだった。これも裏返せば、分別のある成功間違いのない結婚をするようにと説得されたことになる。

すると、説得されたアンも、説得した夫人も「確かな (将来の) 利益をめざして」の結婚を良しとしたのであって、右の三つの訳の想定するところとは逆であることになる。

では次に、後ろに来る文章にはどう書かれているであろうか。先の問題の文章は、「彼女は確信していた (She was persuaded=she was convinced by her own experience)。家族の者の不賛成から来る不利益の全て、彼の職業につきものの心配の全て、予想される不安、遅延、失望の全ての下にあっても、それでも彼女はこの婚約を保持した方がそれを犠牲にするよりは幸福であっただろうに、と。」(29,45-6) と続く。不利益も不安も心配も、あったって構わないではないか、と述べている。一続きの文章で、まるで矛盾することを述べていることになる。ヤハリ、問題の箇所の理解が間違っているとするほかないのではあるまいか。

それではどう読めばよいのだろうか。問題なのはアンが否定しているのは「不確実な未来の善」であり、「確かな現在の善」は肯定しているということであり、したがってそれは如何なるものであるのか、という点である。しかし、オースティンがこういう表現をするのは、もう何度も示して来たように、すべての人間にとって第一に大事にしなければならない「神」のことである。「不確かな将来の善を彼らは受け取ることは決してないだろ

う」というのは、(自分が説得するとしたら、今目の前にある結婚という幸福と共に)「今も此処にあるかくも確かな善である神を受け取るであろう」という意味なのである。もっと積極的に明瞭に述べれば、「目の前におきている結婚問題も自分の場合のように悲惨にはならないように、本当の善は未来の不確かなことではなく、今、此処にあるものとして捉まえるように私はしてあげるだろうに！」となるだろう。つまり人間にとっての最も大切なものは、ラッセル小母さんが言うようなお金だとか地位だとか権力だとかいうものではない。そんなものは、今いくらか持ち合わせていてももっと欲しくなるだろうし、持たなければホントに大事なものまで振り捨てて、結局は将来を当てにするしかないだろう。だがホントに大事なものは、今すでに此処にある。それさえ忘れることなく捉まえていれば、別のものに眼が眩み、この世の不幸を背負い込むこともないであろう。そういうことである。ここにはアンとしては十九歳の時ですらすでに手に入れていた、分別を超越するという「人生に対する根本態度」が表明されているのである。

こういう主張は筆者のオースティン研究においては、もう何度も繰り返し述べてきたので、諄く述べるのはやめにしよう。

ただ、脈絡無視の勝手なでっち上げだと非難する向きのために、こういう思想は直ぐ後にも一連のものとして出ていることを指摘しておこう。

「アン・エリオットはさだめし雄弁であったことであろう！少なくとも、若い頃の温かい情愛 early warm attachment と将来性に対する明るい確信 cheerful confidence in futurity に味方をし、人間の努力を辱め神の思召し Providence を疑うごときあの案じ過ごし over-anxious caution に反対する彼女の願い wishes はどれほど雄弁であったことだろう！」(29,46)

まさにラッセル夫人によって引っかき回されたアンではあったが、この文章があることによって我々読者は安堵させられるのである。アンはもともとこのような思想の持ち主であったことが分かる。ウェントワースとの婚約は、温かい情愛によって包まれ、将来についても「明るい確信」を持ち、努力をすることが十分の意味を持つ。それもこれも神の摂理への信頼に依っているのだ。

これについても、また根本理解が不可能のために疑義を呈する評者が現れるであろう。そこで、**予想問題点への解答**を先回りしてやってしまおう。

①「将来性への確信」は先の解釈と矛盾するか？アンが将来・未来の善を頼む人ではないとすると、ここで「将来性に対する確信」が述べられるのはおかしいではないか、という疑問である。答えて言うならば、ここに述べられている将来ないし未来とは、人生において時間の推移として現れる事象である。そういう事象は、もし人がその事象を含む摂理を理解する者であるならば、世の悲惨事でさえ根源的に肯定された事象となる。きらきらした明るい出来事(しゅったいじ)なのである。後にも触れるハズだが、したがって、アン・エリオットにとっては人生は孤独な暗いものでも退屈なものでもありえないのだ[4]。そういうものであってこそ、その都度の喜びも悲しみ、苦しみも十分に意味を持つのである。

②「人間の努力」の尊重は、摂理と矛盾するか？自分の存立の根拠を確かなものであると確信し得た者は、生き方が変わる。「悔い改めよ！」とも言われる。いずれにしても確信

の持てた証は、安心して努力することが出来るということであろう。

もう一つの誤解：

『説得』を論じる者がしばしば取り上げるものの、ほとんどが誤解しているのが、右の文章に続く、次のものである。

「アンは、若くして思慮分別 prudence を強いられたが、年をとるにつれてロマンスを学んだ。不自然な始まりの自然な帰結 natural sequel であった」(ibid.)。

この文章は、十九歳のアンは思慮分別を大事にする娘であったが後には、そして二七歳の今ではロマンティックな娘になっている、と解される。ちょうど『知性と感性』のマリアンヌがロマンティックな人間、感情的な娘であったが悲恋の痛手を乗り越えて知的な女性になった、という誤解の裏返しとしてである。誤解をどうするかは別にしても、我々はアンがどの時点で人生の根源的理解を得ていたのかを問題にしておかなければならないであろう。我々が確認することが出来るのは、少なくとも十九歳のアンはすでに卓越性をそなえたまともな女性であったということである。

①これを示すに足る資料は、まさに右に検討した「二七歳になったアンは、一九歳のときに（R夫人に）考えさせられた考え方とはだいぶ違う仕方で考えた」という文章であろう。ラッセル夫人に強いられて無理な態度決定をしたし、それに付随する、たとえばウェントワースのためにはどうだ、の、という考えをしたのであって、それを裏から見ると、アンの根本理解は二七歳の今と同じであることになるのだ。最も明瞭な証拠は、17章の終わりにアンがエリオットを評する言葉の中に「激しさと情熱は今なお彼女を捉えるのだ」（151）と書かれているところにある。分別を超越する根本態度のことを言うのだ。

②それでなお納得の行かぬ向きは、次のように考えるがよいだろう。オースティン作品（五大作）は悲劇と喜劇の同居する極めて稀な作品であって、そこには卓れた人間と劣悪な人間と、その中間にぼやけている人間たちとが描き分けられている。これは紛れようのない事実である。嗤われるべき人間としてはエリオット卿、メアリー・マズグローブ、エリオット氏、エリザベスに劣らずラッセル夫人が居る。彼女の人生行路の判断基準は、家柄であり財力である。作家は彼女を何とか無罪放免しようと苦労をしているが、トルストイの『イワンのばか』を読む目でみれば、明らかに老悪魔に魅入られた人物なのである。してみれば、卓越したヒロインであるアンは、彼女に一度決定的な判断主体たることを譲りはしたが、それ以外は一貫して小悪魔さえ寄せ付けぬ人物として描かれているのである。このことは、アンの人生の根源理解がすでに若くして出来上がっていたことを示している。

こうして、問題の文章を読み直すと、「アンは、若くして思慮分別を強いられた」とはいうものの、その意味するところは「一九歳のときにラッセル夫人の計算高い選択方針を押しつけられた」のであって、問題ない。ただ次の「年をとるにつれて as she grew older ロマンスを学んだ」という文章はこのままでは受け取れない。オースティン作品にしばしば見られるトラッピング、話を愉しくするためにか、あるいは読者を笑いものにするためのトラッピングであるとしなければならない[(5)]。そもそも「ロマンティックな恋愛感情を学んだ」とはいうものの、この物語が動き始めたばかりの第四章で、今我々の読ん

でいるように、アンは充分にロマンティックな人物であった。ただ「説得」によって強いられたことによって、いわば「不自然な始まりの自然な帰結であった」と書かれねばならなかったのである。

（Ⅱ－３）もう一つのレッスン

アンが生命力に溢れた人間であることは、右の考察からも明らかであろう。恐らく旧い友人のスミスさんにも引けをとらず「根本的な善の供給源」（スミスさんにとってはそれはアンのことだが、アンにとっては別のもの）を持ち、そこから「快活さと精神の敏活さ cheerfulness and mental alacrity が彼女から失われることはなかった」(235,396) のである。

しかるに、世の『説得』読者には、アンは孤独で世に無用な人間でなければならない、と映るらしいのである。ここにも、オースティンのトラッピングをそれとして読み分けねばならぬ文章が**積み重なっている**と言わねばならない。

アンは、父親と姉がケリンチ邸を出てバースに移り住む際に、一緒には行かず、妹メアリーの嫁ぎ先のアッパークロスに行く。マズグローブの一家はアンの家族とは異なり、アンにとって一種羨望の的になる雰囲気を持っている。そこに入って来てのアンの感懐は次のようである。

「アンがアッパークロスを訪ねたいと欲したのは、一群の人々から別の群れの人々に移ればわずか三マイルの距離でも、しばしば会話の仕方、考え方、思想に全体として変化があるものだということを知るためではなかった。彼女はこれまでそこに滞在するたびに、そのことでガツンとやられずにはいなかったし、あるいは彼女は、ケリンチホールで取り扱われている事柄が（自分たちのサークルでは）かくも一般的に知れ渡っており誰もが興味をもっている事柄であるとしても、そこでは如何に知られていず、あるいは無視されているかを、エリオット家の他の者も知るという御利益に与ることが出来たらいいのにと願わずにはいなかったのである。こういう経験が十分にあったにも拘わらずそれでも、アンは〈自分自身の仲間以外のところでは我々自身は無である〉ことの知り方で in the art of knowing our own nothingness beyond our own circle、**もう一つ別のレッスン** another lesson が自分には必要とされていることを、今や悟らねばならないと思った。なぜならマズグローブ夫妻の、別々に発したのに、大変よく似た言葉のうちに、――（英語文の後略）――彼女は自分が見出した以上にもっと多くの好奇心と同情とが籠められていることを期待してしまっていたのだからだ」(40,63-4)。長くなるので切ったが、マズグローブの娘たちもメアリーも自分の期待していたほどには自分の問題を話題にしてくれなかったことが続いている。

ここに「もう一つ別のレッスン」と呼ばれているものが何か、という問題を考えねばならない。我々はこのようにして文章に引っかかって（トラッピングに引っ掛からないために）考えることによって、文章の読解能力を身につけ、作家がそこに籠めた深い思想を知り、表面的に移りゆく〈筋〉を本当に愉しむことができるようになるだろうからである。

そういう訓練をしないと、一つの文章にちりばめられている数々の言葉に自分の思いなしによって引っかかり作家の全く意図しなかったことを勝手にお喋りし始めることになるのである。こういうはやとりりにとちった例は枚挙するに事欠かない[(6)]。

邦訳を検討しておこう。近藤いね子氏は、「自分たちがいかに無に等しいかを知る技術において自分がさらにもう一歩訓練される必要があると感じた」(321頁)――この訳は筆者の訳に近い。筆者のもそうだが、ほとんど直訳であって、問題はここから始まるのだ。

富田彬氏は、「人は家庭を一歩踏み出せばもはやものの数にもはいらないものだということを知るために、自分はもう一科目勉強しなくてはだめだと悟る必要があると思った」(64頁)。大島一彦氏は、「人はひとたび自分の交友圏の外へ出れば何者でもないのだと云うことを学ぶために――」(53頁)。これらの訳では、もう一つ別のレッスンをする〈目的〉が示されているのであって、学びの〈対象〉は示されていないのである。

今一つ目に触れたものは、入野賀和子氏[(7)]の、「――人は自分の家族以外のところでは自分自身が無の存在であることを学ぶことがなおも必要であることを彼女は今感じていた」(102頁)というのがある。これは、明らかにレッスンの〈対象〉として、人が自分の仲間以外のところでは無であること、を上げている。この読み方からは、作家がこの一文に籠めている大事なことがらは何も受け取られないであろう。なぜなら、ソンナことはこれまでのアッパークロス滞在でアンは知っていて、だからそのために訪問するのではない、とわざわざ上に書いているのである。また右にも触れたように、ソンナことはことわざでも我々には良く知られているのだからである。

問題なのは、このことは事柄としては良く知られてはいるが、どのように理解すればよいのか、その知り方 art of knowing は明らかではないことである。二つのことが考えられなければならないのだが、オースティンは〈明示〉しない。読み取れる者には読み取れるようにしか、書いてはいないのである。したがって、こういうものを読み取ることができるようにするには、訳書としては直訳の方が、ゴツゴツしていても、よいということになり、近藤訳ならば用が十分に足りる。

先ず第一に、書かれていることとしては、アンがマズグローブ夫妻やその娘たち、それにメアリーに、「実際彼らが抱いた以上にもっと多くの好奇心と同情とが籠められていることを期待してしまっていたのだからだ」とある。「去る者は疎し」とか、「人は自分自身の仲間以外のところでは無である」といった真理をそれとして認めるならば、自分もよそ者としてこの社会に入ってきたときには自分に纏わることがらをこの社会の人々が無視しているはずだと思って然るべきであろう。それなのに自分は「それよりも多く期待してしまっていた」と言うのだ。だから、アンが「自分には必要とされていることを、今や悟らねばならないと思った」という「もう一つのレッスン」とは、「期待しないこと」であったのだ。「彼女にできたのはただ、これからはそんな妄想 self-delusion は避けようと決心することと、ラッセル夫人のような本当に同情してくれる友を一人持っている希有な恵みを、特別な感謝を以て考えることのみであった」と続いているのが、立派な証拠であろう。

この期待しないというレッスンは、「期待しないことを学ぶべきだ、それは今此処に在るものをキチンと受け取るべきだからだ(この後半部分は、アッパークロスではアッパー

クロスの衣を着れという話)」と続く。とすると、先の（Ⅱ－２）の場合に「惨めな現在」と「不確かな未来の善」を受け取ることを拒否することによって、時間的な期待の問題を論じたのに対して、この場合には「この場所には別の場所の事柄を持ち込まない」という空間的な期待の問題が論じられているとも言えよう。さり気なく、今此処に根源的なものを見て他所のことを見ようと期待するなと述べている、と取ることができるのである。

さて、この「根源的なものをそれとして把捉する」というオースティンの重要命題は、この『説得』を書くに至って、進化を遂げる。それが、「期待を持たないで今を見る」の話がまだ続いている次の段落に出て来るのである。

マズグローブの人たちは男たちは男たちで、また女たちは女たちでそれぞれに仕事や興味関心で手一杯である fully occupied in all the other common subjects と述べて、「アンは、全ての小さな社会がそれぞれその社会の談話の材料を指定することは大変適切なことであると認め、自分が今移植されてきた社会の価値あるメンバーに早くなりたいと望んだ。少なくとも二ヶ月をアッパークロスで過ごす見込みであったので、自分の想像力、記憶それに自分のあらゆる観念にできるだけアッパークロスの衣を着せることが、彼女には義務としてかなりに必要であった」(41,65)。

アンは独り居ることの愉しみを知っている人間である[8]。しかし人といるときは共に語り合うことの愉しみも知っている。それをさらに進めて、自分の本質的なもの（想像力、記憶、観念というが、そこには人生の根源的理解が当然含まれている）を変えたり捨て去ったりすることはできないが、アッパークロスではアッパークロス風に歌い、踊ろうというのである。人と共に悲しんだり喜んだりしようというのだ。

それではもう一つのレッスンの第二の面、「自分自身の仲間以外のところでは我々自身は無であること」の第二の知り方とは何であろうか？それは、ソレとしては明示はされていないのだが、我々としては是非読みとらなければならないことがらである。すでに触れたように、**第二のテキスト**に関しては「人は自分の家族以外のところでは自分自身が無の存在であること」を「学ぶべきだ」という馬鹿げた読み方まであるのだが、アンないしオースティンにとってはこんなことは学ぶ必要があるどころか、実は〈バカ命題〉として却下されねばならないのである。したがって、答えは、もう一つのレッスンとは、この世間のだれもが知っている〈統計的真理命題〉を、卓れた者には通用しない〈道徳的偽命題〉として退けるという受け取り方である。

この読み取り方については、説明が必要だろう。

あの『プライドと偏見』の冒頭の有名なフレーズも、迂闊に読めば書いていることそのままの「普遍的真理 a truth universally acknowledged」なのだが、主人公たちには該当しない。それと同じように、「人は誰も自分自身の仲間以外のところでは無である」というのは（先には「去る者は日々に疎し」とも言い換えたが、古くはアリストテレス『ニコマコス倫理学』Ⅷ・５,1157b10～に「互いに離れていることも長引けば、愛を忘れさせることがあると思われる」と書かれていることである)、マズグローブやケリンチホールの嗤われるべき人々には該当しても、少なくともこの作品の二人の主人公には該当しないのだ[9]。『説得』でそのことを示している箇所を、拾ってみよう。

①いま読んでいる第六章に、ウェントワース大佐の姉、クロフト夫人が二人の弟のうち、牧師をしていた兄の方とアンとが親しくしていたと勘違いして、
「わたくしの弟がこちらにいた頃、お近づきになったのは、あなたの妹さんじゃなくて、あなただったのですね」と訊いたのに対して、「アンは、顔を赤らめる年頃はとっくに過ぎていると思ったが、感動する年頃はまだ確かに超えてはいなかった」(46,75) と書かれている。アンは、八年前の婚約者ウェントワースの姉に、彼と自分のことかもしれない関係を話題に持ち出されて、八年間サークルの外にいた人のことではありながら、感動を隠すことが出来なかったと言うのだ。
②第七章では、ウェントワースがマズグローブの姉妹と親密になったところで、「彼は自分の愛情を、彼の行く手に現れる感じのいい若い女になら、誰にでも注いでいいのであった、アン・エリオットは別として」(58,95)、とあり、アンにだけは愛情を注ぐことはもう出来ないのだ、と述べているかのようでありながら、じつは「だから彼が、姉の当て推量への返事として、次のように言った時、アンのことだけは密かな例外だった。――」(ibid.,96) というところからは、アンが問題圏に入ってくれば、結婚相手としては誰でもよいとは言えず、もう決まっているのだ、といった見解であることになる。ただ、ここの解釈に関しては異論があるかもしれない。それでも少なくとも、ここでは、「それに彼が自分の会いたいと思う女について、もっと真面目くさって語った時、アン・エリオットは彼の気掛かりの外にあったのではない」(ibid.) という文章を挙げることができる。
③さらに、ライムで事故にあったルイーザの病状はもういいだろうと思ってアッパークロスを去ったアンが、ラッセル夫人に会って、自分の心が変わっているのにすぐ気づく (115,188) というくだりがある。かつてはマズグローブの人たちが自分たちのサークル外のことだとして父や姉のことをいい加減に思っているのに慣れようと思ったアンが、「最近、父や姉やバースさえも、自分の視野から見失っていた」(116,188) のだし、「じっさい、彼女は自分にとって本来最も大事な話題を、ラッセル夫人と同等の心配をしているふりをして、夫人と話すのに努力を必要としたのだった」(ibid.,188-9) と書かれている。
④まだある。ラッセル夫人が、ウェントワースとルイーザのことを聴いて、祝福はしたのだが、「内心では彼女の心は、二三歳でアン・エリオットの値打ちをどれほどかでも理解していたその男が、八年後にルイーザ・マズグローブとやらに魅せられたということに対して、腹立たしい喜び、喜ばしい軽蔑に騒ぎ立った」(ibid.) と書かれている。これも、時間・空間的に離れたら人間の意識はどうなってもいいのか、どうなのか、という同種の問題である。
⑤もう一つ、アンが初めて父と姉が住んでいるバースの家に移動した場面で、父と姉にとって「アッパークロスは何の興味も惹かず、ケリンチにはわずか、すべてはバースだった」(128)。これに対してアンは、「父と姉が幸福であることを訝りはしなかったかもしれないが、しかし、父が自分の境遇の変化に面目失墜を感じもせず、在郷地主の義務にも威厳にも何も悔やむべきものをみないで、都会生活のちっぽけなことに自惚れの強さを見出しているのに、溜め息をつかざるを得なかった」(129,209) と言う。

色々な同類の事象から普遍的真理命題を導く帰納法を機能させるために、先ず箇々の事象の内に、事柄の本質を見ておかなければならない。それで、上の①～⑤がどういう意味を持っているのか、それぞれの記述の本質的な要素を取り出すことにしよう。
①は、「人が自分のサークルの外に出れば無だ」というのが普遍命題ならば、アンが八年前の恋人のことと思える話を聞いて感動を抑えきれなかったのは、ウェントワースがアンに掛かれば上の命題に反する存在になっていることを意味する。これだけで、感動するアンが卓れた人間であるとか、感動を誘うウェントワースがそうだとかは直ちには言えないであろうが、その可能性は十分に残されている。
②は、今度はウェントワースが、もはや同じサークルの人とは言えないアンを、時間・空間のかなたにやらずに取り扱っているという例である。仮に（そう解釈する人が多いが）、彼がアンを怨んでいたとしても、あるいは余所余所しく振る舞うとしても、それは意識の外に置くのとはまるで違うのである。ここには、「マタイ福音書」5.21-22が関わっていることは見落とせないだろう。そこでは、兄弟に対して怒る者は、殺人者と同じく裁判を受けねばならぬといい、しかし、兄弟を軽んじる者はもっと酷い刑を受けねばならぬという。
③では、アン自身が、マズグローブ夫妻のように、サークルの外に出ていた父と姉を自分の視野から消えさせていた、というのだ。だがアンはそれを〈当たり前のこと〉とはしない。「ラッセル夫人が今度のエリオット家の住居に対する自分の満足などを語っているとき、アンは、自分がそれよりももっと多くライムやルイーザやライムの自分の知り合いたち全てのことを考えているのを夫人に知られることを、恥ずかしく思ったことだろう」（116,188）と記されている。
④も同種だと書いたが、残念ながらラッセル夫人はアンの値打ちも、ウェントワースの本心も何も分からずに、そんなことを思っただけである。しかし、作家は、まちがいなく問題の本質を理解して、こう書いている。ここではどうやら〈問題の本質〉は、「価値認識」にありそうである。③を振り返ってみれば、アンが、「自分にとって本来最も大事な話題」（親愛の出発点であるべき昵懇の間柄である家族の問題）を、それほど重大なものとして感じることが出来なかったことへの反省が記されていると言える。
⑤の父と姉は、自分たちの今・此処[(10)]にしか興味のない人たちである。これは、最初に〈普遍命題〉と述べた「人が自分のサークルの外に出れば無だ」という意味で、父と姉が嗤いの対象として挙げられていることになる。姉についても次のような文章が見られる。「アンはまた、エリザベスが折り戸をさっと開いて一つの応接間から別の応接間にその広さを誇るようにして大はしゃぎで歩いて行くのを見た時、ため息をつき、微笑み、また意外にも感ぜざるを得なかった。かつてはケリンチホールの女主人であったこの女が、二つの壁と壁の間の三十フィートほどの距離に誇るべき広がりを見出そうとしているのではないか、と思われたからである」（129,210）。
これら五つの事例から、どういう結論を導き出すことができるだろうか。

「人が自分のサークルの外に出れば無だ」という統計学的真理命題を、全面的に認めることを恥じる人間が居る。いくら時間・空間的に距離が大きくなっても、忘却してはいけ

ない対象があるのだ。自分の眼前を通り過ぎる人々をすべて、単に車窓の景色のように見て済ませ得るひとは、自分もそのように処理されて終わるのだ。

逆に、恩誼のある人たちや愛情で結ばれていた人々をいつまでも胸に留めているひとは、こうすることによって人を「死んでも死なない」人にするのだし、こうすることによって自らも「永遠性」を獲得するのだ。この不思議に関しては、セネカの『人生の短さについて』が語り尽くして余りあると思われる。

こうなると、先の「将来の善を当てにしない」という問題との絡みでも、一言述べねばならないだろう。「現在を大事にする」ということが一旦確認されねばならないのだが、それは眼前にあることなら何でも大事にせよというのではない。眼前にある〈大事なもの〉を大事にせよ、そうでなければ〈将来〉にも〈過去〉にも〈大事なもの〉を大事にすることはできない、というのだ。

現代小説では、「現在を精一杯大事にする」というようなセリフ回しは、ほぼハンコでついたように、「だから、今を楽しみましょうよ」と翻訳され得るものでしかない。今とは、もちろんこの「刹那」という時間の中に繰り広げられる事象である。しかし、今を本当に大事にするのならば、その刹那に何をどうするのか、何をどうすることが〈今を大事にすること〉なのかを、考えなければならないだろう。相手にとって、また自分にとって。そしてこの「大事なものを大事にする」という際の「大事なもの・ホントに大事なもの」とは何かを明らかにしなければ、〈今〉も〈大事に〉も言葉がとろけてしまって、問題はなんにも始まらないのである。この「大事なもの」についての考察も、私が知っている限りでは、最も分かり易く書かれている書物は、上に触れたセネカだろうと思う[11]。とにかく、今を本当に大事にするのであれば、それは同時に「過去」を正視し、「将来」を大事にするのでなければならないハズなのだ。「現在」において大事なものは、「過去」にも「将来」にもヤハリ大事であるハズだからだ。

（Ⅱ―4）「説得」に従うのは弱い心か？　決断力について

〈性格の強さ・弱さ〉の問題も一通りの読み方では片づかない、本質的なものを読み出す読者を待っている問題といってよいであろう。

ウェントワースと八年ぶりに対面したアンは、言葉を交わすこともなく終わった再会に、感情の高まりを押さえることが出来ないでいる（56,92-3）。作家は、次のように書く。

「彼（ウェントワース）はアン・エリオットを恕してはいなかった。彼女は自分を酷い目にあわせた。見棄て失望させた。そのうえ悪いことには、そこに**彼女の性格の弱さ**を示していた。それは、果断に富んだ自信の強い性格の彼としては、とても堪らなかった。彼女は、他人を喜ばせるために自分を見棄てたのだ。それは無理な説得のせいだった。弱さと臆病だったのだ」（57,95）。

また、第10章で、アッパークロスの若い人たちにアンとウェントワースが加わってウィンスロップ方面へ遠足に出かける場面がある。この際に、マズグローブ夫人の妹の嫁ぎ先近くまで来ながら、この家に立ち寄らず引き返そうというメアリに対して、ルイーザはヘンリエタとチャールズは少なくとも立ち寄るべきだと強く主張する。ルイーザ自身は行か

ずに、二人を待っている間に、ウェントワースとそこいらを歩きまわるが、その二人の話をアンが立ち聞いてしまう場面である。

ルイーザ：「何ですって！わたしが一旦なそうと決心し、またそれが正しいと分かっていることを、あんな女の（いいえ、それが誰だってそうです）態度や干渉のために撤回させられるなんてことが、あるもんんですか！いいえ、そんなに易々と説きふせられてしまうなんて、とてもわたしには考えられないことですわ。一旦決心したらもう決心したんです。――略――」(81,135)

ウェントワース：「あなたのような確かりした心の方が付いていられて、お姉さんは幸せですね。――略――これが**もっと重要なことがらで、彼女らが意志の堅固さと知性の強さを必要とする状況**に置かれたときは、一体どうしようというんでしょう。彼女がこんな瑣細なことにもつまらない干渉をはね返すだけの決断力を持たなかったら、彼もまたお姉さんも災難ですよ！――（中略）――あまりにも従順で煮え切らない性格の一番困ることは、どんな影響を受けても、信頼され得ないことです。良い印象だって長続きするかどうか確かではないのですから。また誰でもその印象を左右することができるのですから。幸福でありたい人を、強くあらしめよ、です」(135-7)。

アンは、「もっと重要なことがらで、彼女らが意志の堅固さと知性の強さを必要とする状況」というのを、自分の結婚問題に引き当て、ウェントワースが８年前の自分の判断をどう思っているかを、これで知ったと思う。

しかしながら、この同じ場所で、作家は断固たる態度がそのままで善いものであるとは言わない、というよりもむしろ、その言い分に対する反論を用意しているのである。

まず、右に示したように、そこまで来て引き返すことを提案したメアリについて、「彼女は断固として答えた『いいえ、じっさいだめよ。――』。要するに、彼女の顔つきと態度が彼女は断じて行かないと that go she would not 宣言していた」(79-80,133-4) と書かれているが、彼女は人としての振る舞い方を知らない劣悪な嗤われるべき人間として描かれているのである。僅かな骨折りを惜しむというよりも、むしろ自分の生家の家柄を鼻先にぶらさげて婚家を蔑む勢いで、その親戚をも蔑んで、目の前にその屋敷がありながら訪ねようとしない、夫の叔母に親しもうとしないのである。ウェントワースは、そのメアリの言い分を聞いて、「ただわざとらしい賛同の微笑 an artificial, assenting smile を送ったが、それには侮蔑の目付き contemptuous glance が一緒だった。また、アンにはその目付きの意味が十分によく分かっていた」(80,134)。

メアリーには一種の〈強い心〉があるのだが、大佐はそれに対しては侮蔑しているし、それをアンも当然のことと認識しているのである。

次の場面では、さらに問題点が明瞭になる。

皆でライム見物にゆき、ルイーザがウェントワースの止めるのも聞かず堤防から飛び降りて大けがをする場面がある。先にウェントワースに褒められたルイーザは、いわば強い性格を押し通したために、こんな災難を招いてしまったことになる。そしてウェントワースは、自分がルイーザに譲歩したのが悪かったのだと自分を責めている。

それを聞いていて、アンの思いを作家は次のように書く。

「アンは思った。性格の強さのもつ普遍的な幸福と利益 universal felicity and advantage of firmness of character に関して彼が前に言った自分の考えの正当性について、疑問が生じるということはないのかしら、と。また、精神はその他の全ての質と同じように、**全体との関係とそれ自身の限界** proportions and limits を持っているはずだということがこの人を目覚めさせるということはないのかしら、と。**説得されやすい気質も時としては非常に果断な性格と同じように幸福に有利にはたらき得る**ということに彼が気付かぬはずがない、と彼女は思ったのだ」(108,181-2)。――ウェントワースは、この時に自分の弱腰を自覚したことを、後に（20章173,285）で口にしている。

ここで明示されるのは、〈決断や性格の強さ・弱さ〉の問題というのは、単にそれだけで善い悪いという判断の出来るものではなく、ある「全体との諸関係とそれ自体の諸限界」によって善悪は決まってくるということである。その意味するところはまだ必ずしもはっきりしていないが、作家はそうアンに考えさせている[12]。

〈性格の強さ・弱さ〉の第三の段階は、次のように考察されねばならない。

アンが学校時代に世話になった友を訪ねる場面がある。スミスさんという三つ年上の女性だが、財産家と結婚したものの夫はその知人のために財産を蕩尽した挙げ句二年前に死亡しており、しかも彼女は激烈な急性リウマチを患い、惨憺たる暮らしをしているのだった。しかしうち解けて話すようになってから、アンは驚かざるを得なかった。そんなひどい状態にありながら、

「アンには、まったくこの状態であるにもかかわらず、スミスさんは仕事と愉しみの時間に比べては無気力と憂鬱とはほんの瞬間にしか味わっていない、と信じる理由があった。（それはこうだ。）どうしてそんなことがあり得るのだろうか？と彼女は注視し観察し熟考して、ついにはこう結論づけた。彼女の場合は単なる強さ fortitude のケースでも諦めのよさ resignation のケースでもない。従順な精神は忍耐強くあるかもしれない、強い理解力は決断力を供給するだろう。しかし、ここにはそれ以上の何かがある、と」(145,235)。

ここでは「柔軟な心」がではなく「強い心」が主題のようではあるが、本物の従順な精神 submissive spirit というのは間違いなしに柔軟心、ただし従うべき者への柔軟心である。したがって、続けて言われる。

「ここには知性の弾力性 elasticity of mind がある。つまり、慰められるべき性格、すぐに<u>**悪から善へと立ち帰る力**</u> that power of turning readily from evil to good、〈仕事を見つけて自分を自分から運び出す力〉、であり、それはただ自然からのみ得られるのである。それは天の最も精選された贈りものである。そしてアンはこの友だちを、神の慈愛に満ちた摂理[13]によって他のほとんど全ての欠乏の埋め合わせをするように計画が為されているように見える実例の一つとして眺めたのである」(ibid.)。

下線部分は、他動詞ではなく自動詞として、神を忘却した状態から神へと立ち帰るその力をさす。これはまさに神からしか来ないものである（（Ⅰ－２）での236,396への筆者のコメント参照）。こういう性格をスミスさんは持っている、というのだ。

オースティンはこの作品で「究極的な慰め」という言葉を使用している（292,390）。ひとが万の世の憂いから立ち上がり、また強い心で生きて行くことが出来るのは、自らの存在の根源として命の言葉が来ていることを確信したときである。問題の〈性格の強さ・弱さ〉というのは、したがって、この確信との関わり（というよりも、この確信の中味であるところの〈存在の根源〉との関わり）を除いては十分に論じることは出来ないのだ。メアリやルイーザのように強がっていても、根源との結びつき（proportion と呼んだ）が出来ていなければ、平素はぐずぐずと不平を言い暮らすほか無い。他方、自らを弱いという者（ウェントワースは最後にその境位を得るのだ）は、そのことによって強いのである。

因みに、今はそのことを論じる場面ではないのだが、このアンの考察から我々は次のことを知ることが出来る。つまり、こういう人間に備わっている神と関わる能力を他人に認めることのできる人間というのは、当人も相手をさらに凌駕する卓越性を備えていなくてはならないだろう（スミスさんが神の恵みを得ているというアンは、神の恵みの何たるかを知っている）。こうして、これまでに少なくとも二箇所の考察で明らかにしたアンの神理解が仮に筆者の強引な読み込みに過ぎぬとしても、ここに至ってアンの卓越性、神理解は明瞭なテキスト的裏付けが得られたことになるだろう。このことが、もう一つ別の問題に関して重要な根拠となるのだが、それは別の項で論じよう。

（Ⅱ―5）　洞窟のイドラ（個人的体験による先入観）

アンがホワイト荘に行って、メアリらから待っていてくれるよう言伝てのあったことを聞いたときのことが、次のように記されている。

「アンはただ次のことをしていさえすればよかったのだ She had only to submit――。つまり、伝言に従って、椅子に掛け外面的には落ち着いており、〈モーニング〉が終わる前には少しは味わうことを覚悟していた心のあらゆる動揺にたちどころに投げ込まれた自分を感じることを、である」（215,359）。

この動揺とは、ウェントワースがハーヴィルに呼びかけて始まる手紙書きと、マズグローブ夫人とクロフト夫人が始める興味深い対話の間にはまり込んで感じる〈悲惨な幸福、幸福な惨めさ〉のことである。アンがここで耳にしたクロフト夫人とマズグローブ夫人との話は、次のようなものであった。

マズグローブ夫人がヘンリエタの婚約した経緯を話す。夫人はマズグローブ氏とヘイター夫妻に「説得」されて、また若い二人も結婚に夢中になっていて（「いつまでも意地を張るのは正しくない」（216,361））と夫人は言う）、「そんな先例が幾らでもあるように、彼らは①すぐにも結婚してベストを尽くす方が善いと私たちは思ったのです」、「ともかく、②長く婚約状態にあるよりは、その方がよいと私は言いましたの」（ibid.）。

クロフト夫人曰く「私もむしろ若い人たちに②長い間婚約させておくよりも、③少ない収入の上ですぐに身を固めさせ、少々の困難には二人で一緒に戦わせる方がいいと思いますわ」（ibid.）。

彼女らが「危険で賢くない」というのは「不確かな婚約」、「長引きそうな婚約」なのだ

が、アンはこれらの話が自分のことのように思われて思わぬ興味を惹かれる。

アンは、二人の夫人の話を自分のことのように思うというのだが、何が自分のことと同じなのだろうか。もちろん全てではないだろうが。この後で、二人の夫人は「あの互いに認め合った同じ**真理** the same admitted truth」(217,362)と呼ばれているもの（上の①②③）を繰り返した上で、こんどは自分たちの結論に反するやり方が、実例としていかに悪い結果を招いたかを語り合うことになる。こうなると、いよいよ「分からなくなる」だろう。アンはどういう立場にあるのか？悪い例として挙げられているのは、長い婚約だとしたら、これはアンの場合ではない。収入が少ないために結婚しなかったというのが、R夫人の説得の結果ではあるが、唯一アンに当てはまる事項であろう。それが悪い結果を招いたとすると、別れ別れの惨めな現状を指すことになる。――ただし、この悲惨は現在進行形であって、しかも人生の達人とも言えるアンにとっては、悲惨さは唯の悲惨さではなく、喜ばしい悲惨、悲惨な喜悦であるとも言える――。

ではもう一度整理しながら、考察を加えてみよう。

二人の夫人が、「婚約期間が長くなること」と、併せて挙げている「不確かな婚約 uncertain engagement」とを避けた方がよいと主張しているのは、如何なる理由によるのだろうか。この作品に描かれた事例からみるならば、当人同士が好き合って周囲もフィアンセ同士だと認め合っているのが、チャールズ・ヘイターとヘンリエッタであった。彼らの場合、幸いにその方向へは転がらずに済んだものの、外見、財産、地位などもっと有利な条件を持った異性が現れると、不確かな婚約、暗黙の合意は容易に危機に陥るのである。婚約期間が長くなる場合の不都合もここには挙げられていないが、ベンウィク大佐とハーヴィルの妹の場合のように、一方が死亡してしまい結婚に至らないというのを挙げることができよう。

このようにみれば、なるほど夫人たちの主張は一面の「真理」を含んでいると言ってよいのかもしれぬ。だが、ヘンリエッタの場合には彼女の浮気心が問題だったのであり、それによって危機を招きかけたのであって、ヘイターが賢明な対応をして関係を絶たなかったことにより今に至っている。ベンウィクはフィアンセに死なれてしまい、それで結婚にはたしかに至らなかったが、二人にとってそれでもう一つ上位の目的というべき「幸福」が得られなかった訳ではないのである（死によってというが死んでも死なない例があり、それは既に触れた（Ⅱ－３。アンのような、人への思いを大事にする場合））。

もう一つここに考察を加えるべきものがある。つまり、危機に陥らないで済む場合である。そういう場合があるのか？ある。既に最初の「**事例考察**」で見たように、現世の善を見て目の色を変えない人間が居る。ばかのイワンのような人間である。もっと言うと、本当に大事なものを今ここで見ている者は、現世の善に惹かれて選択を変えることがない。それがアンのように「心変わりしない場合」である。これは卓越した人間の場合と言っていいのだろうが、彼らには婚約期間の長いことどころか破談期間が長かったことさえも乗り越えられるのだった。だが、彼らの事例は「**心変わり**」**の問題**、および「24章冒頭の後日談」の問題に譲って考えることにしよう。

（Ⅱ－6）24章冒頭、後日談：後の談　冗談か、すごい結語か？

「――若い男女がいったん結婚することを決めたときには、たとえ貧乏であっても分別がなくても imprudent、あるいはお互いの究極の慰め comfort のために相手がかくも僅かしか必要ではないようであっても、忍耐力によって自分たちの目的を実現するのである。こういう言葉は、結論として述べるのは悪しき教訓 bad morality であるかもしれない。しかし私は真理だと思う。そしてそんなカップルが旨く行くのならば、心の成熟、正義の意識、二人の間の独立した財産といった分の良さを備えたウェントワース大佐とアン・エリオットがあらゆる反対を圧伏するのに失敗するようなことがあろうか？――」（232,390）。

この文章の概略を掴むのはそう困難ではないだろう。極々の大雑把には、「若い男女は忍耐力さえあれば誰だって結婚という自分たちの目的を達成するものだ、したがって、いわんや並の人間ではないウェントワースとアンの場合、旨く行かない訳がない」といったものであろう。

ところが一般の男女の場合に、ただ忍耐力があればというだけでなく、①「貧乏であっても」、②「分別がなくても」に第③のものが加わるとき、読解は厄介になってくる。マズグローブ夫人とクロフト夫人の間ではそんなことが「真理」にまで昇格してしまったのだが、オースティン作品で嗤われるべき人とされる人たち、ないしそれと同様な人々の間では、少なくとも①と②に関しては受け容れられないであろう。エリオットは金のためにエリザベスを袖にして「身分卑しい女」と結婚したし、ラッセル夫人は当にそのためにこそアンの婚約に嘴を挿んで破談にさせ、彼らのある意味での「目的達成」を八年間引き延ばさせたのであった。それよりも『プライドと偏見』の冒頭の「普遍的真理」に該当する女性版真理（第22章）は、まさに結婚こそ金銭的に豊かな生活のために選ばれるものである。逆ではないのだ。分別を欠く imprudent 場合とは――まさに金目当ての選択が旨く行くか行かぬかに関わるのが分別であると言える。その分別を欠いて結婚を実現した場合に想定されるのは、これまたオースティン作品に無数に出て来る人たちである（と、このように考えたが、忍耐力さえ互いに備わっていれば、男女二人が共に生活する〈結婚〉は成り立つのかもしれない）。いずれにしても、ここから振り返ると、マズグローブ夫人とクロフト夫人の間で成立した「真理」は、統計的真理ではなかったが、彼女らのせせこましい個人的体験を元にした「バカ真理」の一種でしかなかったということになるであろう。

このように見てくると、ウェントワース、アン組の見通しを推し量るのに一般の若者の例としてこういうものを持ち出すのは、冗談ないし皮肉としか見ることは出来ないであろう（敢えて冗談、皮肉の類ではない場合を挙げようとするならば、とびきりの賢明なカップルで、今は貧困にあえいでいても、また狡賢さがなくても、知慮ある二人であるからすぐにそれなりの生活は出来るようになる（ディッケンズ『クリスマス・キャロル』など参照）といった場合にしなければならないだろう）。もし作家の意図がそういうところにあるとしたら、下線を引いた第③の部分は、そういう性格のものとして理解されるようになるのではないだろうか。

では、下線部はどういう意味なのだろうか？結婚と「究極の慰め」との関係が、何かお

かしなものであるのだろうか。一般に、結婚の〈目的〉とは何だろうか？いうまでもなく、それは幸福の実現であろう。幸福になることを目指して結婚するのであり、その結婚のためには、――しばしば裕福であることや知慮が備わっていることが挙げられるのだが、ここではそれを欠いているとしてもと言う――忍耐力がありさえすれば（本来の目的である〈幸福〉は実現するかどうか問わないが）、結婚だけは誰であれ実現することができる、と言うことになる。そして、そうであれば、ウェントワース・アン組のように、備わるべきものが備わったカップルならば、結婚は当然うまく行くのだ、と言うのである。しかしそうであっても、「あるいはお互いの究極の慰めのために相手がいかに必要ではないようであっても」というフレーズはどのように組み込まれているのか、必ずしも明らかではないであろう。

考えられるところから手を付けて行くと、「お互いの究極の慰め」というのは「幸福」のことであると見ることも出来る[14]。そう読めるとして、その場合、「究極の目的実現のためには相手が居なくてもよいと思われる」というのは、何か理想を高く持った場合のことに触れている、と思われる。しかしながら、その場合には相手がいなくてよいのだから、結婚などという通過点は無用だということにならないだろうか。わかりにくい。それで例によって、既刊の邦訳書を参照させて貰うことすると、近藤いね子氏は、「また将来の究極的幸福にとってそれほどお互いに必要でもなさそうな者たちであっても」と訳しておられる。この訳は原文をほぼそのままに日本語に移したものとして筆者の試訳とほとんど同じと言えよう。次に大島一彦氏もほぼ同一の意味であると見られる。「またお互いに究極の慰めのためにはいかに相手がさほど必要ではなさそうであろうと」(314)。中野康司氏訳も、「お互いの最高の幸せのためにお互いが絶対に必要だというわけではなくても」（413）と訳しているが、究極の慰めである幸福のために結婚そのものが必ずしも必要ではない、という意味には納まっているであろう。ただ富田彬氏の場合は、「またお互いにどうしてもこの人でなければ自分の最後の慰藉にはならないというわけではなくとも」（390）とあり、「この人でなければ」と入れることにより「また最後の慰藉のためには誰かは入り用なのだが」という見解を前提していることが伺える。いずれにしても、どのような意味で述べられているのかは、明らかにはならなかった。

そこで、強制的思考を敢行することにしよう。作家を例によって皮肉屋で物分かりの特別によい人間だと想定するのである。すると、これまでに読んできたように、オースティンの世界では、「真の幸福」のためには迂闊にそういうことは言えないとしても[15]、「究極の慰めの実現」のためであれば、相手など必要としない。神、究極の価値が私を存在させ、考えさせ行為させて下さっているということを理解すればもう十分であることになる。そして、このことは『エマ』で大胆に主張したのだったが、これは必ずしも倫理道徳的な見解とは言えない[16]。否、むしろ世間的には究極的な慰めについてこんな語り方をしては bad morality と言わざるを得ないであろう。オースティンはそのように考えていると思われる。

註

1．「ヴァージニア・ウルフ著作集」第七巻『評論』pp.108-9。ウルフは、『説得』の主人公は孤独で倦怠感に満ちているといった見方をしている。

2．惣谷美智子氏、『ジェイン・オースティン研究』Ⅷ。安達みち代氏、「『説得』あらすじと解説」(『ジエイン・オースティンを学ぶ人のために』所収) 201頁。入野賀和子氏、「『説得』における孤立感」(「大分県立芸術文化短期大学研究紀要」第40巻、2002年所収)。
3．これについてもV.ウルフと見解を異にする。ウルフ前掲書、p.108見よ。
4．アンニュイを指摘するのはウルフであった。
5．たとえば次のような例がある。
イ、アンが妹メアリーの要請でアッパークロスに行って、そこの二人の娘たちの生活ぶりに対して抱いた感想。二十歳と一九歳の二人はエクスターの学校で一通りの教養 accomplishment を身につけて来て、今やその他の多くの若い令嬢たちと同じように、当世風に幸福に陽気に暮らしていた。そこで、「彼女らをアンはいつも自分の知りあいの中で最も幸福な人たちに入ると見ていた。けれども、私たち誰もが何からの心地よい優越感 comfortable feeling of superiority のおかげで彼女たちと取り替えっこ出来たらいいなと思うようなことにならずに済んでいるように、アンは二人の楽しみ全てと交換に彼女自身の優雅で教養ある知性を放棄するようなことはしなかっただろう」(39,62-3) と書かれているのだが、どうだろう。
彼女たちを some of the happiest creature of her acquaintance と見ていたという点でも、既に眉に唾をしなければならないのだが、次の文章では「私たち誰もが――ように」と言い、一般的、普遍的真理命題が判断基準に提示されているかのようだが、「私たち誰も we all」とは誰を指すのかに注目して読めば、この文章はおかしなものだというのが分かってこよう。自分は果たしてそんな優越感を持っているだろうか。いや、某かの優越感はあったとしても、だからといって、自分の持っている詰まらぬ才能を全部自分の持ち金と交換してやるという金持ちが現れたら、一も二もなく即刻交渉成立と行くのではないか？いわんや相手は門地がよく美貌も備わりそこそこの教養もあると来たらどうだ。金と権力と名誉と健康、これだけそろえば自分の持ち物は何でも譲り渡す、そういう人間ばかりではないか？ということは、ここで「私たち誰もが」と書かれているのは、「普通の私たち全部が」という意味ではないのだ。人間として生きるために必要なものだけで生きている人、右の本文で言えば、神を見ながら安心のうちに日々の自分の生活を悲喜こもごも送りたいと思っているような人、そんな人だけが、どんな相手とであれ（ある人は神とでも競ってみせると言った）取り替えようなどと言う誘惑に陥らずにすむのである。
ロ、あるいは、この後『説得』という主題に触れて、説得に乗りやすい人間の弱さと自分の我を張る強さはどちらがよいか（二－４）、といった議論が展開されている。しかしこれも、どちらに軍配をあげるというような結末は記されてはいないが、一種の引っ掛けである。作家には、またこの作家の書くトラゴコメディアの読み方を心得た読者には初めから、乗って良い説得、固持してはいけない性格の強さというのが明らかなのだからである。
6．たとえば、ここには「我々の無であること」という言葉がある。しかしながら、その文脈は「去る者は日々に疎し」ということわざに要約することの出来るものであっ

て、作家が主人公の孤独について述べている訳でも何でもない。しかしはやとちりにとちる人は、ここを材料にしてそういう演説をするのである。

7．前掲、入野「『説得』における孤立感」。

8．妹メアリーのことを she had no resources for solitude 独居するための資質、孤独への慰めがない、と評している（35,56）。

9．アリストテレスも、じっさい「思われる」と言うだけで、断定している訳ではない。すでに卓越的な人間同士の愛が永続的であることは、同書の３,1156b17で述べている。

10. 彼らは未来を当てにし過去を誇る人間でありながら、自分らの都合によって過去を切り捨て未来を選ぶのである。したがって、彼らの場合には、「今・此処」と言ってもアンの堪能し得る今・此処ではなく、ただの刹那的今でしかない。

11.「人生の短さについて」。また、「マタイ福音書」6.33,22.36-40も大事な箇所である。

12. 宮崎孝一氏『オースティン文学の妙味』が、「弱さと強さ」という見出しの文章で、このコップの事件を契機にして、「アンとウェントワースの立場が逆転する観がある。弱いと見られていたアンが非常な強さを秘めていたのであり、ウェントワースは意外にも脆い面を示した」（166）と書いており、別の節では、「それ（チャールズのプロポーズをアンが断ったこと）を聞いたウェントワースの心に、アンに対する考え方の変化が起こったことは想像に難くない。つまり、アンが周囲の動きに受動的に従う女性ではなくなったことを知ったのである」（181）と記しているのは、冗談の類でしかない。アンの考えが本質的に変わったかどうかは、後に本論で触れる。

13. merciful appointment、appointment は、ペンギン版の Gillian Beer の註（p.247）に依れば、providence の意味を持つ。

14. 正確にはそうではない。後述。

15. というのは、古典のギリシャ・ローマ的な幸福の語り方は、慰めそのものが主たる内容ではなく、善き行為、善き生のあり方であったからである。真の幸福はしたがって、正しい〈神・人〉関係理解に立って、しかるべく振る舞うところに成り立つのでなければならなかったのである。

16. 次に（Ⅲ）で論じるように、人間の究極の慰藉を得ていたエマは、どうしてもそれだけでは語り終えられてはならなかったのであり、倫理・道徳性をオースティンの語る意味で発揮せねばならなかったのである。

（Ⅲ）『説得』の立体構造

前節で我々は、アン・エリオットにおける「安心の極意」を宗教的・根源的なものの理解に見ようとした。勢いそれを振り出し、安心の極意とそれの現実生活への応用にも言及するところがあった。ここでは、主としてその「根源的なものの理解と、それによって活かされる現実生活の関連を見て行くことにする。

（Ⅲ－１）アンの幸福感（の重層構造）（20章）アンの宗教理解と喜怒哀楽

『説得』第二十章は、幸福感に着目してアンの思考が読み取れるように構成されている。

初めに、姉エリザベスの幸福感とアンのそれとを比べる記述がある。エリオット家の一族が集まる演奏会で、「演奏室に入るとき、エリザベスとアンは共にたいへん大変幸福だった」(174,287)。姉の幸福感[1]は、一族で羽振りの良いダブリンプル未亡人の娘と腕を組み、「自分の欲しいもので手の届きそうにないものは何もなかった」からであり、その出所は「すべて利己的な虚栄」であった。それに対して、アンの幸福感の出所は「すべて惜しみない愛情 generous attachment」であった、と言う (175,287)。

これは、自分から婚約解消をした後も八年間ずっと思い続けてきたウェントワースが、八年ぶりに会って以来ずっとよそよそしかったのが、次第にその愛情が自分に戻って来ているのを感じ、つい先ほどさらに親しく言葉を交わしたその余韻とも言うことが出来る感情であった。だからそれはまた、「彼女の幸福感は内側から来るものであった」と言い換えられている。

ところで、この感情の延長上に次の二つの文脈があるのだが、それらはどのように関連するのか、が問題である。その間には一つの段落があり、時間にして数分のズレに過ぎない。

その（1）として、アンが、「彼は自分を愛しているにちがいない」と確信した際に、「これらの考えが、それらに伴う視覚 vision と一緒になっていたのだが、余りにも彼女の心を占め攪乱したので、(周囲にたいする) 観察力は残っていなかった」(175,288)。

第（2）に、「アンの心はこの宵の演芸のためには最も好ましい状態にあった。それはまさに十分に心を打ち込めるものであった It was just occupation enough。彼女は（今）感じやすいものに対しては感情を、陽気なもの the gay に対しては元気 spirit を、技巧的なものに対しては注意力を、そして退屈なものに対しては忍耐力を持っていた。また少なくとも第一幕の間はこれほどコンサートを好んだことはないほどだった」(176,289)。

（1）の文章と同じような内容を持った文章は、バースで初めてウェントワースを見かけたとき (19章) に、次のように記されている。

「数分間、彼女は自分の目の前に何も見えなかった For a few minutes she saw nothing befor her。全くの困惑であった。彼女は我をうしなった She was lost」(165,270)

また、(Ⅱ－5) で引用した二人の夫人の話を聞いていたアンが、陥った状態として、「アンは何もはっきりとは聞き取れなかった。彼女の耳の中はただ言葉のうなり音だけだった。彼女の心は混乱していた」(217,362) と記されていた。

このような記述は、しばしば言語の脱落と同時に生起する根源自体の現前として、禅仏教などの悟りの場面として解説されるものである[2]が、オースティンにおいてはそのような使い回しはされて来なかったし[3]、またこの作品でもそのように解すべきではないであろう[4]。

それでも少なくとも明らかなことは、これらの表現をなされる箇所では、主人公アンにおいては理性ないし分別の働きがタガを外してしまい、情景が意味を持たなくなってしまっているということが出来る。場合によっては同様の場面で無上の喜悦が感じられたりする (158,258で senseless joy が、また①の文章の前には先に引用した「彼女の幸福感は内側から来るものであった」がある)。

（2）の文章が示すのは、(1) の状態から覚めて、心のスイッチ（というよりむしろ

譬えとしてはギアの方がふさわしいであろう）を切り替えた状態である。「コンサートが丁度始まったので、彼女は控え目なやり方で幸福であることに暫し同意しなければならない（175,289）」。筆者は先に、アンは人生の巧者であると述べた。実に彼女はこのようなことが出来るのである。その状態というのは、審美眼や批判眼という理性を大いに発揮することの出来る状態であり、意志のコントロールが出来る状態であった。たまたま、この場面は怒るべき事柄も、憂うべき事柄も生起してはいないのでこのようであるが、必要とあれば大いに怒り、大いに憂うることも彼女には可能なそういう次元の事柄、この作品のほとんどの場面がそうである喜怒哀楽の場面である、と言える。

アンにおいては、ときおり時間が止まるような理性も分別も置き忘れられるような状態が生起し、そこから覚めた状態、日常の状態では理性を働かせて過ぎて行く日常生活が展開されるということである。この順序を敢えて意識し、文章にしたのが次の場面である、といえる（ただし、ここでは先のような楽しみではなく、不安がテーマになっている）。

先に（Ⅱ－５）で引用したホワイト荘のことがらに立ち返ってみよう。

「アンはただ次のことをしていさえすればよかったのだ。つまり、伝言に従って、椅子に掛け外面的には落ち着いており、〈モーニング〉が終わる前には少しは味わうことを覚悟していた心のあらゆる動揺にたちどころに投げ込まれた自分を感じることを、である」（215,359）。

アンは、ウェントワースがハーヴィル大佐に呼びかけて始まる手紙書きと、マズグローブ夫人とクロフト夫人が始める興味深い対話の間にはまり込んで様々な動揺を感じながら、〈悲惨な幸福、幸福な惨めさ the happinessof such misery,or the misery of such happiness 〉に深くはまり込んだ、というのだ（215,359）。この「悲惨な幸福、幸福な惨めさ」というのは、〈愉しい苦しさ〉に似て、充実した幸福のあり方を示すと見てよいだろう。何れかのみの幸福と悲惨さではなく、両方が併在するのである。しかし、ここで問題にしたいのはそれではない。もう一段深いところでの根源者把握の目があって、そこに安住した者であるアンが「伝言に従って、椅子に掛け外面的には落ち着いており、〈モーニング〉が終わる前には少しは味わうことを覚悟していた心のあらゆる動揺にたちどころに投げ込まれた自分を感じること」を「していさえすればよかったのだ」と記されていることである。ここには「していさえすればよかった」と言われることによって、「悲惨な幸福、幸福な悲惨」が直接にアンの意識の対象として掴まれているのではなく、この愉しい苦しみをもう一つ別の次元のところから見ている意識がある。いわば余裕を持って〈安心〉の上で掴んでいる、そういう態度が描かれているのである。

そうしてみれば、ここにはアンの「根源的な存在への委ね」が語られなければならないのは当然であろう。要するに、ある意味でアンは自在に没入したり、理性を働かせて現世を愉しみまた苦しむことができるのであるが（その元興しは神）、それらを引き起こす根源的存在、根源的場所をもそれとして理解しているのである。前作との関連を付ければ、『マンスフィールド・パーク』Ⅰ巻１１章での自己離脱[(5)]は、この「没入」に匹敵する。宗教性を勉めて押し殺したこの作品にして、ここまでは論じていたのである。

（Ⅲ－２）アンの宗教性と道徳性の関係　アンの過去の婚約破棄を振り返る二つの場面（229,385、230-1,387-8）

（１）アンとウェントワースが七年半ぶりに愛情を確かめ合いうち解けて来し方を振り返る。ウェントワースが、自分よりもアンの近くにいたエリオットの恋敵としての優位を、嘗てと同じくラッセル夫人がアンと一緒でもあったことに触れて語ったとき、アンが言う。

「あなたは状況を区別するべきでしたでしょう。今度は私のことを疑うべきではなかったでしょう。状況がずいぶん違いますし、私の歳もずいぶんちがいますわ。もし私がかつて説得に従ったということで間違っていたとしても、それは安全の面から為された説得に従ったので、危険を冒すための説得にではなかったということを思い出して下さいな。私が従ったとき、私は**義務** duty[(6)] のために従うんだと思ったのですわ。でも、今度はどんな義務もお呼びではありませんわ。もし今度の場合、私にとってどうでもいい人と結婚したならば、あらゆる危険が招き込まれあらゆる義務違反をすることになったでしょう」（229,385）。

七年半前のアンの決断についてはごく僅かに二行しか書かれてはいないのだが、下線部の仮定の部分は何を示しているのだろうか。第四章には「彼女は確信していた。家族の者の不賛成から来る不利益の全て、彼の職業につきものの心配の全て、予想される不安、遅延、失望の全ての下にあっても、それでも彼女はこの婚約を維持した方がそれを犠牲にするよりは幸福であっただろうに、と。」（29,45）と書かれていたし、その点に関しては問題なしとしてきた。詳細は繰り返さないとして、結局は自分の考えではなく、愚かなラッセル夫人の説得に屈したことを以て、間違っていたとしたのであった。ところが、この文章と、その数時間後にアンが吐いた科白では、いずれもその間違いが間違いではなく正当であったとされているのである。四章の文章でさえ、七年前のアンの判断ではなく、この物語のはじめ、僅か数ヶ月前のアンの判断を記しているのだった。アンは結局、説得に従ったことをどう考えているのか。そして、特に義務の問題はどう捉えるべきであるのか。

先ずはこの文章で、「安全の面から為された説得 persuasion exerted on the side of safety に従ったので、危険を冒すための説得にではなかった not of risk」と言うのは何を指しているかを明らかにしよう。普通には、ここはウェントワースの将来性が不確かであったことを前提にして、安全のために決断を見合わせた、と読むべき処であろう。この後にも言うように、「あれは助言が善いか悪いかはただ結果が決めるといったケースの一つだった」と言えるとすれば、少なくとも説得者の意図は善を目指していたので、それで善いのだということになろう。

しかし、次の文脈でのこの「助言が善いか悪いかはただ結果が決める」（231,388）、ですら、アンの考えの中でもはなはだ不安定である。「助言をする」ないし「説得する」という行為の適否、正邪はいろいろな側面から判断されなければならない。助言者の意図においてどうであるかを考える場合には、（ａ）状況把握だの相手の真の利益などを考慮する力を欠いているがただ〈好意〉から発することは間違いない、というのと（ｂ）助言者

および相手の人間としての善（＝幸福）の実現に適っているというのでは、まるで別のものとなる。助言者の意図を別にしてよければ、（c）後は当人が己の選択にどれ程の重みでその助言を取り入れるかによって多様性は生じるであろう（その場合一つの評価は、結果を待たずしても、選択の当人が人生の達人である限り、何でも善であり得さえするのである）。また（d）その選択の〈結果として〉何が生じるかは、誰に対して生じるかによって意味を異にし、当人の人生の熟達度によって、それこそ当人の中においてすらまるで多様な評価が同時に併在することが可能であろう。

さて、そうすると、ラッセル夫人の説得は、（a）の場合の好意から発するものであったとして、アンがこの説得に従ったのが間違いなかったとするのは、アンが（c）に分類される選択をし、それが彼女にとっては、どうやら（2）においてもっと明らかになるように〈倫理・道徳的〉な選択であったという点で正しかったと自分で評価していることになりそうである。

しかしそうすると、（c）においても〈倫理・道徳的〉な選択ではない選択として、別次元のものがあり、第四章でのアンの考え方によれば、人間に本当に大事なものは何かを知らぬ者によって「未来の善」をめざして行われる決断は、今眼前にある最大の善を蔑ろにする愚かな判断（罪と言ってもよいもの）であるということであった。さらには、「神の思し召しを疑うあの案じ過ごしはよせ」(29) というものであった。この人生巧者のアンの見方は、ここで（というよりは寧ろ次の（2）の文章を挙げねば不充分であろうが）アンが述べている〈倫理・道徳的〉な反省とどのように整合性を以て位置付けられるのであろうか。やはりこういう問いを前にしては、「それとこれとは区別しなければいけませんわ。あなたは今の私の言うことを疑うべきではないでしょう」(cf.229) というアンの発しそうな声に耳を傾けなければならないだろう。

それで、次に、第（2）の文章を検討しておこう[(7)]。

（2）「私、過去のことをずっと繰り返しよく考えていましたのよ。そして正しいことと間違ったことを――あ、つまり私自身に関してですけどね――偏りなく判断しようと努力して来ましたの。そうすると、私は正しかったと思わざるを得ないのです。それでずいぶん苦しい思いはしましたが、お友達に指導されたという点で私は全く正しかったと思わざるを得ないのです――あの方をあなたは今よりは好きになりますわ。だって私にとってあの方は母親の立場にいらっしたのですもの――でも誤解しないで下さいね。あの方が助言で間違っていなかったと、私、言っているのではないのです。あれは助言が善いか悪いかはただ結果が決めるといったケースの一つだったのです。そして私自身としては、私はこれに似た状況ではどんな状況でもそんな助言は決して与えないでしょう。でも、私の言いたいのは、私は彼女に従ったことで正しかったし、私が違う仕方で振る舞っていたら私は諦めたことで苦しんだよりも婚約を続けたことでもっとそれ以上に苦しんだことだろうということなのです。何故って、私、自分の道義心 conscience において苦しんだでしょうから。そんな感情が人間本性において許される限り、私はいま自分を咎めるものは何も持ちませんの。もし私が間違っていなければ、強い義務感というのは女に与えられた資質としては悪いものではありませんわ」(230-1,387-8)。

ここでは明らかに、ラッセル夫人の判断の正当性は初めから度外視されている。そし

て、ただアンの「義務」（それもただ倫理的義務）のみが問題になっていると言える。ラッセル夫人の〈指導〉〈助言〉が間違っていなかったと言うのではない。「あれは助言が善いか悪いかはただ結果が決めるといったケースの一つだったのです」というのは、上にも見たが、結局は「善いも悪いもない」と言っているようなもので、ただ「自分の受け取り方の適否、正邪があるのみ」である。その正邪というのがここでは問題である。ラッセル夫人の〈指導〉を一部自分の判断に加えるだの、半分、いや八割、といったことではなく、自分の見解はそっくり別に措いて、〈指導〉をそっくり受け容れるのだった。「お友達に指導されたという点で、私は全く正しかった」というのは、「お友達の指導に身を任せたという点で、私は全く正しかった」という意味なのである。その理由が挙げられている。ラッセル夫人は、アンの生まれたときからの縁をもち、彼女が十四歳の時に、母が自分の亡き後を頼んで逝った女性であった。そしてアンにおいてこういう見解があることは、我々には当然に予測され得たことであった。なぜならば、アンは父親や姉妹だけでなく妹の嫁ぎ先の義父母たちまで、一旦昵懇の間柄になった人たちとは、「時間と場所を異にして生活したならば記憶から遠のいてしまうのが当然だ」という一般的な真理を認めることを恥として生きる女性であった。彼女にとっては、したがって、そんな昵懇の間柄にあるひとの意見を無視して生きることは、その人を亡き者にするに等しいと思われるらしいのである。それはその他の価値体系に依るのではなくただ「道義心」「良心」の問題なのである。それは彼女にとっての倫理・道徳的な要請であった、と言える。

しかし、ここでアンが大事にする倫理・道徳性とはどういうものなのだろうか。

それというのも、ここに我々読者にとっての大きな問題が生じるのだ。この「倫理・道徳性」は、オースティンが『マンスフィールド・パーク』で、敢えて宗教的・至高の価値を作品の表面から押し隠すような工夫をしてまで[8]、その価値を称揚した「人間として踏み行うべき生き方」であった。宗教的な生き方の秘訣――それが同じ八年前の婚約破棄をめぐって述べられたアン・エリオットのもう一つの見解の根柢にあるものであった――を提示する『エマ』とを書いた後の、この『説得』での二つの一見して**次元の異なる**見解はどのように位置付ければよいのであろうか、と。

ここでは――辻褄合わせではないのだが――アンにおいては人生の根源的原理に即して行動するという性格が備わっているという点と、彼女のその都度の行為が倫理的であるという点が問題である。そのような倫理学、そのような宗教論が上手に組み立てられたら我々の課題はお仕舞いということになる。そして、そのような倫理学はすでに用意されているのである[9]

『マンスフィールド・パーク』において、作家はファニーを通して、すでに人間が幸福に生きて行く基盤は誰にでも備わっていることを示した。つまり、「幸福の国である天国が万人の此処にあるということ」（「マタイ福音書」3.2,4.17）である。するとそこからは、人間の生き方は、幸福になるために富や権力を努めて獲得しなければならないという形ではあり得なくなる。だからこそ、「方向転換しなさい Let your hearts be turned from sin」（同）と告げられているのだった。では、どこへ向かうべきかというと、第一に神へと「感謝」という仕方で向かい、次には同朋へと「愛」という仕方でむかうことになる。

ただし、それだけでは日常の行為を言い表すには物足りないし、じっさい不足である。ラッセル夫人などとどのように関わるべきか等々、様々な日常の行為に倫理的であるにはいかにあるべきかという問いがついて回る。日常の倫理行為には、知慮による善い選択の繰り返しが要求されよう[(10)]。そこには倫理的行為の原理命題から実践の三段論法によって選び取られた具体的な行為がなされるという構造がなければならないだろう。では、その倫理的行為の最初のいわば「原理命題」とは何だろうか？人間に〇〇〈すべし〉と命じる根源的なきまりといえば、「(人間を含めた) 万有を存在させ支配する神の支配にしたがうべし」以外にはあり得ないだろう。すると、人間の考えることなすこと全てが神の支配するところであるがゆえに、間にたとえ十段の推論が介在しようと直接無媒介であろうとも、彼ないし彼女が行うことは（この一連のことがらを念頭に置き、具体的行為に神の支配が姿を現していることを自覚する者には、という但し書きが必要であろうか？)、全て神の支配にしたがっていることになる。

このようであるとすると、アンが、人生の巧者であるアンが、「義務感によって選ぶ行為は、結果を見なくても、何でも善であり得る」ことになる。

あるいはまた、一歩を敢えて踏み出せば、エマのように、あるいはさらに傷口の深い「サムエル記下」第11章のダビデのような、没義道な行為がなされたとしても、精神の芯が真っ直ぐで、過っても直ちにそれを正すならば、許されることになる。――今は、アンの倫理的行為はベースとして根源的存在への全幅の信頼があったことを指摘すれば、筆者の責めは果たされたことになろう。

註

1．happy,happiness という語は、この作品でも一般に幸福感を表すものである。
2．「井筒俊彦著作集」6「禅における言語的意味の問題」など。
3．『マンスフィールド・パーク』Ⅰ,11に、自然への没入――if the sublimity of Nature were more attended to, and people were carried more out of themselvers by contemplating such a scene という意味深長そうな句が現れるが、これでもそのようなものではない。
4．筆者の見解では、禅仏教においても、またキリスト教神秘哲学においても、このようなものを見神としているのは勘違い・誤解なのであり、言語脱落はオースティンがアンに割り当てているような働きなのである。それも位置づけを確かにしょうとすれば、極めて卓れた特性と言わねばならないのである。
5．拙稿「小説『マンスフィールド・パーク』とは何か」(本学「研究紀要」第49巻所収) p.16。
6．ここでは義務は純粋な道義心だが、この作品でオースティンは「利己的に振る舞うこと」を義務と呼ぶ人種についても面白い言及をしている。第21章、スミス夫人の言葉として。
7．次の引用文との間に、こういうのがあるのも要注意であろう。「このような精緻な幸福を脅かす不安を鎮めるには、感謝に満ちた誠実な黙想の一時を持つのが一番良かった.――」(386)。
8．拙稿「J・オースティン『マンスフィールド・パーク』とは何か？」参照。

9．拙稿「小説『マンスフィールド・パーク』とは何か」p.27。
10.『ニコマコス倫理学』Ⅵ、12、1144a24以下参照。

（Ⅳ）ウェントワース最後のレッスン＝アンの最初のレッスン

アンが、ウェントワースに自分が婚約解消の際にラッセル夫人の説得に従ったことを正しい判断だったと述べたとき、ウェントワースは、今はまだ駄目だがやがて自分も彼女を赦せるようになるな気がすると言った後に、付け加える。

「でも自分もまた、過ぎし方を考えていたのですよ。そして、ラッセル夫人以上の自分にとっての大敵が一人居なかったかどうかという疑問が浮かんだのです。自分自身の自己という敵が、ね」(231,388)。

そして彼は、先には金がなかったが、自分が1808年に数千ポンドの金を持って帰国したとき、自分がプロポーズの手紙を出したら、あなたは受け入れてくれただろうか？と問う。アンが然りのサインを出すのに対して、「自分の**その他の全ての成功**に唯一最後の栄誉を与えることとして、自分もあなたが受け容れてくれると考えたし、希望もしたのです。だけど、自分はもう一度プロポーズするにはプライドが高かった[1]、余りに高かったのです」(ibid.）と言い、自分の成功とプライドについて、次のように付け加える。

「自分はね、自分が享受するあらゆる祝福を自分自身で手に入れるのだと信じる満足感に慣れっこになっています。栄光ある骨折りとそれへの正当な報酬に得意になっています。逆境にある偉人たちのように、ね」。そして微笑みを浮かべて、言うのが、

「自分は精神を運命に従わせるように努力しなければなりません。**自分がそれに値する以上に幸福であることを受け入れることを学ばなければなりません** I must learn to brook being happier than I deserve」(ibid.）であった。

過去のことを考えて、問題なのは自分のプライドだったと気付いたのに続いて、現在の自分とプライドに言及する。それは右の文字通りに読めばよいのだが、少しずつ言葉を補う必要があるだろうか。なぜ彼は、「自分が享受するあらゆる祝福 blessing を自分自身で手に入れるのだと信じる満足感に慣れっこになっています」と言うのだろうか？祝福と訳した blessing をしあわせとか幸せと訳して、自分がよろこぶ enjoy その幸せを自分が努力して手に入れると考え、またそう考えて満足するなどという、まどろっこしいことは、世間では誰も思いつきもしないであろう。それで、この文章をきちんと読むためには、世間の人でも分かる次の文章から読み解く方がよいことになる。「自分は、栄光ある骨折りとそれへの正当な報酬に得意になっています」。ウェントワースだけでなく、誰でも、様々な努力が実を結んだら、それはまさに自分の努力にたいする正当な〈報酬〉だと考えるだろう。「自分は誇るに足りる存在である、あるいは誇るに足りる行いをしている」そういう人間は、『ニコマコス倫理学』第四巻第三章でアリストテレスが書いている限りでは「自分が大きいものに、それも最大のものに値すると考えており――ここにプライドがある――、また実際それに値する」のである。しかし、それでは拙いというのがウェントワースの気付いたことである。ここにはオースティンの神学が展開されているのである。アウグスティヌスがペラギウスとの間で戦いとった、人間の意思と神の働きかけの関係理解として、骨折りないしは努力に先立つ「状況理解」「意志の発動」も、「意志の継続的保

持」および「身体のもろもろの働き」も、すべて人間がそれを持とう、動かそうとして持ち、「自分の働き」と呼べるそういうものは何もない、全てにおいて神の働きが先立ち、それが人間の存在および働きとなって実現するのだ。したがって、その自分の働きに対して報酬として金を初めとして様々なものが手に入っても、これを自分の手柄として「得意になる」ことは出来ないのだ。

これがウェントワースの言わんとしていることであるとすると、「自分が享受するあらゆる祝福を自分自身で手に入れるのだと信じる満足感」という言葉は、筆者の訳語そのままで充分理解し得るものとなるであろう。先ず、「自分が享受するあらゆる祝福」とは、神と人間のことがらの関係をよく理解できる者にとっては、神の人に下されるあらゆる祝福はよろこびの対象となるものであるということを示す。しかるに人は、仮に一旦右のような理解に至った者ですら、しばしばそれを忘却して、神が祝福し給うのは人間の心の、あるいは行いの善さに対してであると思いなし、「祝福を自分の手によって獲得するのだ」と考え、また満足するのである。

「自分は精神を運命に**従わせる** subdue my mind to my fortune ように努力しなければなりません」とは、それではなんだろうか。これに反するあり方は、「fortune を mind に従わせる」であろう。それは通常は「自分の精神のあり方が善くて、それに幸運が付き従って来る」という意味に取る。それはまさに、あらゆる出来事が神の摂理によって出来するのに、人がその功を横取りして、自分の努力、行い、存在の善さによって功績として手に入れるのだと考える、ということなのである。したがって、ウェントワースはここで fortune という言葉を使っているが、「運命」は、むしろ正しくは「providence 摂理」と言うべきであろう。そして、この通常人の考え方を反転させて、摂理が先立つのであるから、そのように精神に認めさせよ、というのが、彼の言わんとしていることである。

さて、そうすると、摂理が先立って自分の存在および善き働きとそれをそれとして認める精神の働きが生起させられる。〈それをそれとして認める精神の働き〉は、この際「感謝」と呼ばれるものであり、それ自体が「人の最高の働き」として、古代的な意味での「幸福な」あり方をしていることは明らかである。この幸福のあり方が、自分の功績に対する当然の報酬というものではないこと、それが「自分がそれに値する以上に幸福である」という意味なのである。

ウェントワースはこれを受け入れることを学ばねばならないと述べているのである。これは、ウェントワースならずとも、**「最後のレッスン」**「究極のレッスン」と呼ぶに相応しいものである。彼がこのような精神性を備えていることを、彼が軍人であり、無骨一辺倒であるかのように書かれている（四章）ことから疑う者があるとするならば、それは当たらないであろう。軟弱な人間であれば精神性が備わっているなどという主張の方が、むしろ成り立たない。作家はベンウィク大佐を文学の味わえる者に仕立てているが、彼は同時に勇敢な男であった。勇敢の徳を備えているということは、然るべきしかたで振る舞えるということ、常に向かうべき方を向いているということを意味するのである。また、「あなたの持っているもので、貰っていないものがあるか。もし貰っているのなら、なぜ貰っていない者のように誇るのか」（１コリ4.7）という言葉など、キリスト教国の紳士なら誰でも知っているのである。

この『説得』という作品におけるウェントワースの「最後のレッスン」がこれなのだが、しかし人間が人間としてふさわしい生き方を始めるに当たって必要なレッスンという意味では、これは「最初のレッスン」である。作品には現れなかったが当然予想された、アンにおいての最初のレッスンと同じものと言ってよいだろう。アンについては、すでに何度も言及してきたように、人生の巧者として、七年前の婚約破棄の際にもすでに根源的なものへの眼差しを得ていた。それを何時得たのかということは作品には全く触れられていないので、詮索するのは無意味であるが、生まれつき神的なことがらの理解を得ている者はいないのだから、人にはその何時という時が必ずある。それをアンの最初のレッスンと呼ぶならば、アンの最初のレッスンとウェントワースの最後のレッスンの間にアンの「もう一つのレッスン」が語られていたことになる。

ところで、ウェントワースの「最後のレッスン」と呼んだが、それで終わる訳ではない。彼もまたこれを始まりのレッスンとして、繰り返し「アナザーレッスン」を受けることになるであろう。

註

1．恋の飛翔力によって本来のプライド（高邁）の徳をも打ち捨て謙遜を学ぶのは、『プライドと偏見』のダーシーであった。彼の逢着した難問は、自分自身と宥和することができないという点にあった。58章。ウェントワースはこの問題に出会してはいないが、二人とも根源的存在との統一を果たすことになる。拙稿「入野賀和子「『自負と偏見』――自負の功罪」を読む」を参照されたい。